

になる。皆の仕事はキャベツ畑の草取り、漬物用のトマトの収穫。

九月交替命令で交替して、原隊、スイソエフカ駅前に戻る。山の分所も終えて駅前に集合し、五百人ほど、主に土場整理。十月半ばダモイ実現。最後の貨車積みで一人犠牲の出たのは痛恨事。積み込んだ貨車に乗ってスイソエフカさらば。

ナホトカで五十人ほど残された組に入り、船積みに従事。十月二十八日か二十九日入港の英彦丸に乗船できる。主力は千五百人ほど、モスクワ帰りで、二千五百人と引揚げ始まって以来の乗船数であったとか。船内でリンチしきり。

十一月一日、夢見た日本、舞鶴港へ着く。早朝、緑濃き日本の山々を眺めて落涙。上陸しDDTの洗礼、入浴、復員業務を終わり、郷土室で近親者の懐かしい便りを読んでいる折、戸外で大乱闘、十人ほどタンカで運ばれる。

十一月五日、七年ぶりに故郷の駅頭に立つ。

シベリアの労苦も、同じ日本人によって苦しめられ

た事が沢山あったのが誠に哀しい事で残念でならない。

シベリア抑留を

赤化と敬遠された屈辱

岐阜県 吉村 昭 春

昭和十五年十二月、満州牡丹江省寧安県七星坂下村に開拓団として入植しました。同所にはすでに我が坂下町の先遣隊が開村されており、希望に燃えて渡満いたしました。赤い夕陽の茫々たる大地を目の前にして思わず胸のたかまりを覚えたのを、つい昨日の出来事のように思い出します。

昭和二十年八月十日、召集で三浦大隊に入隊いたしました。問もなく終戦を迎え横道河子で武装解除を受け、昭和二十年九月十二日に入ソ、ウオロシロフの収容所に入り、抑留生活が始まりました。

その後ハバロフスクなど三カ所ほど転々と収容所を変わり、昭和二十三年十二月明優丸で帰国するまで三

年余りの抑留生活を送りました。

作業は主として木材の伐採でした。九月入ソの時、大隊千人の日本人が、翌年の四月には六百人になっており、なれない土地と寒さ、いかに作業がきついものだったかわかると思います。死者をどのようにして始末したのか、我々には何にも教えてはくれませんでした。すべて秘密で処理されたため、どこにどのように埋葬されているか私どもにはわかりません。病気で働けなくなると、牡丹江へ帰したようです。その人達は内地へ帰った人と、またソ連内に帰ってきた人もありました。その正確な記録は私どもにはわかりません。作業中には各分隊に必ず一人の監視がついており、いやでたまりませんでした。

ある夏の日、どこか知らない秘密の軍事基地へ仕事に行った時は、主に雑役で多少楽であり、こんなところならいいなあと思いましたが、ひと夏で終わりでした。

比較的若かった我々は何とか体力があり耐えられましたが、年をとった召集兵の人達は大変だったと思

います。マラリアで四十一度の熱を出し苦しんだ事もあり、材木の下敷きになって死亡した人もたくさんいました。私は左足が木の下敷きになり負傷して苦労しました。食べるものが少なく、汚い話ですが排便は一週間に一回位で、これでは日に日に体が弱っていくのが感じられて、お先まっくらの気持ちでした。

何とか生命永らえて帰国できる事になりました。

二千人の梯団で舞鶴に入港しましたが、穏やかな懐かしい内地の風景と、昔と変わらない内地の人を目の当たりに見て、なぜか無性に腹が立ってきて、三日間上陸拒否をしました。今から考えてみると何のためかそのような行動に出たのか不思議な気がします。多分それは、自分達がこんな苦労をしてひどい目にあったきたのに、それなのにと思っただけでしょう。

それもこれも今はもう懐かしい思い出です。

ただ、これだけは言っておきたい。我々の苦しみも悲しみも、それは御国のためと思つて耐えてきた。それが決して無駄ではなかったと堂々と胸を張って生きていける世の中にしてほしいと思つております。

帰国後、知人の紹介で、ある有力会社に採用が内定しておりました。履歴書を持参、面接に行きますと、シベリア帰りとの理由で不採用になりました。思わず「バカヤロウ」と叫びたくなりましたが、思い直して町のあっせんて開拓地へ入り、農業、そして今は事業を始めて三十年、お蔭さまで成功いたしました。神様はやはり我々に味方をしてくれたと感謝しております。

シベリアを偲ぶ

滋賀県 船川 廣 二

滋賀県に生まれ、小学校卒業後家業の手伝いを続ける中、徴用令により三菱重工業名古屋製作所に入所。昭和十九年十月三十一日、第三航空通信連隊第八中队に配属さる。新品の軍服の支給を受ける。十一月五日第十一野戦航空補給隊に転属。十一月六日博多港出航、釜山へ向かう。

十九年十一月八日、満州国四平省四平街の兵舎に入

ると同時に古びた軍服と防寒衣を支給。新しい服は古参兵に。新兵に銃と帯剣を支給。三八式の銃、これで戦えるのかと不安になる。

兵舎の前に大きな倉庫が林立している。弾薬庫である。原野には非常に大きな穴が掘っており、燃料が野積みされている。我々はこれの警備で昼となく夜となく巡回を行う。

昭和二十年五月頃だったと思うが、時たまではあるが偵察機が飛来。それでも穏やかな軍隊生活を送っているつもりでいたが、近いうちにソ連軍が侵攻して来るかも知れんと全隊員に訓示された。その二日後の八月十五日、部隊長の命令で「全隊員ラジオの前に集合せよ」とのことで、陛下の玉音放送を聞かされ、更に涙を流しながらくわしく話された。「残念ながら戦いに敗れた」。全隊員ただ呆然としていた。「戦わずしてこの部隊は敗れた、部隊は解散しない」と言い渡された。武装解除されるまでは現地人の動静を心配されたのだった。

二十年八月十七日、遂に武装解除、そして一カ月余